

受験番号	
------	--

(潜水業務)

- 問 1 気体の性質等に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。
- (1) 空気は、酸素約 21%、窒素約 78%、二酸化炭素その他が約 1% で構成されている。
 - (2) 酸素は、無色無臭の気体で、物を燃焼させる性質を持ち、高圧高濃度の酸素は酸素中毒を引き起こす。
 - (3) 窒素は、化学的に安定した気体で不活性ガスと呼ばれるが高圧の窒素には麻酔作用がある。
 - (4) ヘリウムは、化学的に安定した気体で、酸素と比べると重たい気体である。
 - (5) 1 気圧は、水銀柱を 760 mm 押し上げる圧力とほぼ同じである。
- 問 2 空気を吹き込んだゴム風船を水深 2.5 m まで沈めたとき、風船の中の空気の体積は、水上のときの体積に比べて何倍になるか。
- (1) 1/5
 - (2) 1/3
 - (3) 2/5
 - (4) 2/7
 - (5) 3/7
- 問 3 水中における光や音に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。
- (1) 水中では、音は空気中よりはるかに速く伝わり、また、長い距離を伝達するので両耳効果が減少する。
 - (2) 太陽光線は、水中で吸収され、透明度のよい水域でも水深 1.5 m では約 1/8 にまで減少する。
 - (3) 水中で光は、青色が最も吸収されにくく、赤色が最も吸収されやすい。
 - (4) 光は、空気と水の境界では一定の入射角以内で屈折するため、水上から水中にあるものを見ると、実際より深いところにあるように見える。
 - (5) 水中でよく見える色は、蛍光性のオレンジ、白、黄という順である。
- 問 4 潜水の種類等に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。
- (1) 潜水には、硬式潜水と軟式潜水があり、ヘルメット式潜水は軟式潜水である。
 - (2) 硬式潜水とは、潜水者が大気圧の状態での潜水する方法のことである。
 - (3) 軟式潜水とは、潜水者が潜水深度に応じた水圧を直接受けて潜水する方法のことである。
 - (4) 軟式潜水には、送気式と自給気式があるが、送気式でポンペを携行することがある。
 - (5) フーカー式潜水とマスク式潜水は、定量送気式の潜水である。
- 問 5 潜水用具に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。
- (1) 水中電話は、ヘルメット式潜水器の場合、ヘルメット内に送受話器を取り付け、船上と通話する装置である。
 - (2) 水深計は、超音波により測定した水深を表示する計器で、現在の水深と最大深度を 2 針で表示するものもある。
 - (3) 水中時計は、現在時刻を表示するばかりでなく、潜水深度の時間的経過の記録が可能なものもある。
 - (4) 流量計は、空気清浄装置と送気ホースの間に取り付け、潜水者に送気している空気量を表示するものである。
 - (5) 水中ナイフは、漁網などが絡みつき、身体が拘束されてしまった場合などに脱出のために必要である。
- 問 6 ヘルメット式潜水における潜水墜落の原因として、誤っているものは次のうちどれか。
- (1) 送気量の不足
 - (2) ウエイトの不使用
 - (3) 排気弁の調節の不適切
 - (4) さがり綱 (潜降索) の不使用
 - (5) 吹き上げ時の処理の不適切

問 7 水中拘束の予防等に関する記述として、誤っているものは次のうちどれか。

- (1) 潜水を予定する水域の状況を事前に調べて、潜水手順を検討する。
- (2) ロープ、漁網などの近くで潜水する場合には、潜水方式の種類にかかわらず水中ナイフを携行する。
- (3) 送気式潜水において障害物を通過するときは、その上を通ったり、下をくぐり抜けずに、その周囲を回るのが最も安全である。
- (4) スクーバ式潜水では、バディシステムで作業を行う。
- (5) スクーバ式潜水で狭い場所へ入っていかなければならない場合には、ガイドロープを使う。

問 8 潜水時の事故等に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 浮力による事故には、吹き上げや潜水墜落があるが、どちらも浮力と水圧とのアンバランスにより起こる事故である。
- (2) 送気式潜水においては、送気が中断することにより潜水者がおぼれる（窒息する）危険性がある。
- (3) ヘルメット式潜水においては、送気量を極度に多くすると酸素中毒の原因となることがある。
- (4) スクーバ式潜水により、潮流の速い水域で潜水作業を行うときは、命綱を使用する。
- (5) 潮流によって受ける抵抗は、ヘルメット式潜水よりフーカー式潜水、フーカー式潜水よりスクーバ式潜水の方が小さい。

問 9 潜水靴等潜水用具に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

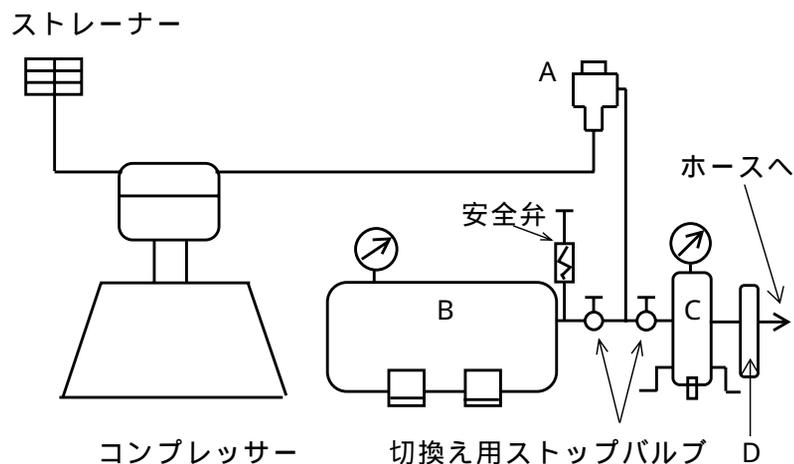
- (1) ヘルメット式潜水に用いる潜水靴は、潜水作業中の体の安定と下半身のバランスの確保のため重量のあるものを使用する。
- (2) フーカー式潜水では、ネオプレンゴムで作られた足袋やブーツを使用するが、移動するときにはフィンを使用することもある。
- (3) マスク式潜水では、通常、潜水服と一体になった潜水靴を使用するが、ウェットスーツを使用する場合は、別に潜水靴を用意する必要がある。
- (4) スクーバ式潜水では、推進力を得るためにフィンを使用するが、フィンにはフルフィットタイプとオープンヒルタイプとがある。
- (5) マスク式潜水の場合、腰ベルトに鉛錘を装着するとともに、両手首にも鉛錘を巻き付けて体の安定を図る。

問 10 冷水域、高所域等における潜水に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 寒冷地方の厳冬期での潜水では、デマンド式レギュレーターが凍結し、給気不能になることがある。
- (2) 淡水潜水で海水潜水と同じウエイトを装備するとウエイト・オーバーになる。
- (3) 冷水中での潜水において、ウェットスーツよりドライスーツが適しているのは、人体が空気で覆われているので、体熱が奪われにくいからである。
- (4) 暗渠内潜水では、潜水者のための非常用、緊急用の呼吸ガス設備を二重三重に備えるなど、潜水用呼吸ガスを確保することが極めて重要である。
- (5) 山岳部などの高所域での潜水では、環境圧力が低地に比べて低いいため、理論上、減圧に必要な時間を短縮することができる。

(送気、潜降及び浮上)

問 1 1 空気圧縮機を使用した潜水業務の送気系統を示す次の図の A ~ D に入れる名称の組合せとして、正しいものは (1) ~ (5) のうちどれか。



	A	B	C	D
(1)	空気清浄器	予備タンク	調節タンク	逆止弁
(2)	逆止弁	予備タンク	調節タンク	空気清浄器
(3)	逆止弁	調節タンク	予備タンク	空気清浄器
(4)	逆止弁	空気清浄器	調節タンク	予備タンク
(5)	空気清浄器	調節タンク	予備タンク	逆止弁

問 1 3 吐出量 (吸込み状態に換算した吐出量) が毎分 300 リットルの空気圧縮機から送気をうけ、毎分 60 リットルの空気を消費する潜水器を用いた場合、潜水できる最高の深度は次のうちどれか。

- (1) 25 m
- (2) 30 m
- (3) 35 m
- (4) 40 m
- (5) 50 m

問 1 4 ヘルメット式潜水器に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 内部圧力の調整は、ヘルメットに設けられている排気弁を頭で押して操作するほか、外部から手で操作することもできる。
- (2) ヘルメット正面下部のドレーンコックは、潜水者が唾などをヘルメット外に吐き出したいときなどに使用する。
- (3) ヘルメットには、正面窓のほかに側面窓が設けられているが、正面窓にはガラスの破損防止のため金属製の格子が取り付けられている。
- (4) ヘルメットの送気ホース取付口の中には逆止弁が組込まれて、送気の逆流を防ぐ。
- (5) 送気ホースからヘルメットに入る空気量の調節は、潜水者自身が腰バルブで行う。

問 1 2 潜水者への送気に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 送気ホースには、沈用、半浮用、浮用があり、用途により使い分ける。
- (2) コンプレッサーの圧縮効率は、吐出圧力が高くなるほど低下する。
- (3) ヘルメット式潜水で使用される送気ホースの内径は、フーカー式潜水で使用される送気ホースの内径と同じである。
- (4) 予備空気槽の内容積は、最大の潜水深度と貯える空気の圧力で定まる。
- (5) ヘルメット式潜水では、ヘルメット内の二酸化炭素の分圧が大気圧下で 1.5% 相当以内になるように送気する。

問 1 5 マスク式潜水器に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) マスクは顔面全体を覆うようにかぶり、その中に送気される空気を呼吸して潜水する。
- (2) マスクには排気弁の付いていないものがあり、この場合、余分な空気や排気ガスをマスクの縁部分から排出する。
- (3) 空気の場合は、送気量が呼吸量を上回った場合には空気が一時貯留され、呼吸量に送気量が追い付かないときに空気のように貯えられている空気を使用する。
- (4) 送気ホースのマスクの取付け部には、逆止弁が取り付けられている。
- (5) 空気の場合は取り付けていないマスクは、空気の溜め場がなく呼吸に消費される量を超えて送気することができないので、空気の消費は少なくてすむ。

問 1 6 スクーバ式潜水器のポンベに関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 空気専用の潜水用ポンベに塗装される色彩表示は灰色である。
- (2) 潜水用ポンベは、内容積が4リットル～18リットルのものがあり、通常はKバルブ又はJバルブを取り付けて使用する。
- (3) 潜水用ポンベのバルブには、開閉機能のみのもので、開閉機能とリザーブバルブ機構が一緒になったものがある。
- (4) 潜水用ポンベのバルブには、高圧ホースがねじ込みによって取り付けられ、ポンベの高圧空気はこのホースを通じてレギュレーターのファーストステージに送られる。
- (5) 潜水用ポンベは、終業後は水洗いを行い、0.5 MPa～1 MPaの空気を残しておくようにする。

問 1 7 潜水回数、潜水時間、ガス圧減少時間等に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 1回の潜水時間を長くすることは、業務間ガス圧減少時間が長くなるうえに、減圧症の危険が増加する。
- (2) 1回の潜水時間を短くして回数をふやすことは、1日についての業務間ガス圧減少時間や浮上回数が増え、実作業以外の時間が多くなる。
- (3) 潜水時間は、潜降を開始してから浮上を開始するまでの時間をいう。
- (4) 浮上後、潜水業務用時間表（高気圧作業安全衛生規則別表第2）で定められた業務終了後ガス圧減少時間が経過したとき、体内ガス圧係数は1となる。
- (5) 修正時間の算出に際し、労働基準法で定められた休憩時間は、ガス圧減少時間に含めてもよい。

問 1 8 1日2回の潜水業務を1回目24m、2回目25mの深度で行うこととし、1回目の潜水時間を60分行った後、船上で1時間30分安静にした場合、2回目の潜水可能時間は次のうちどれか。

（本問及び問19については、別表(1)、(2)を用いて算出すること。）

- (1) 100分
- (2) 113分
- (3) 120分
- (4) 127分
- (5) 135分

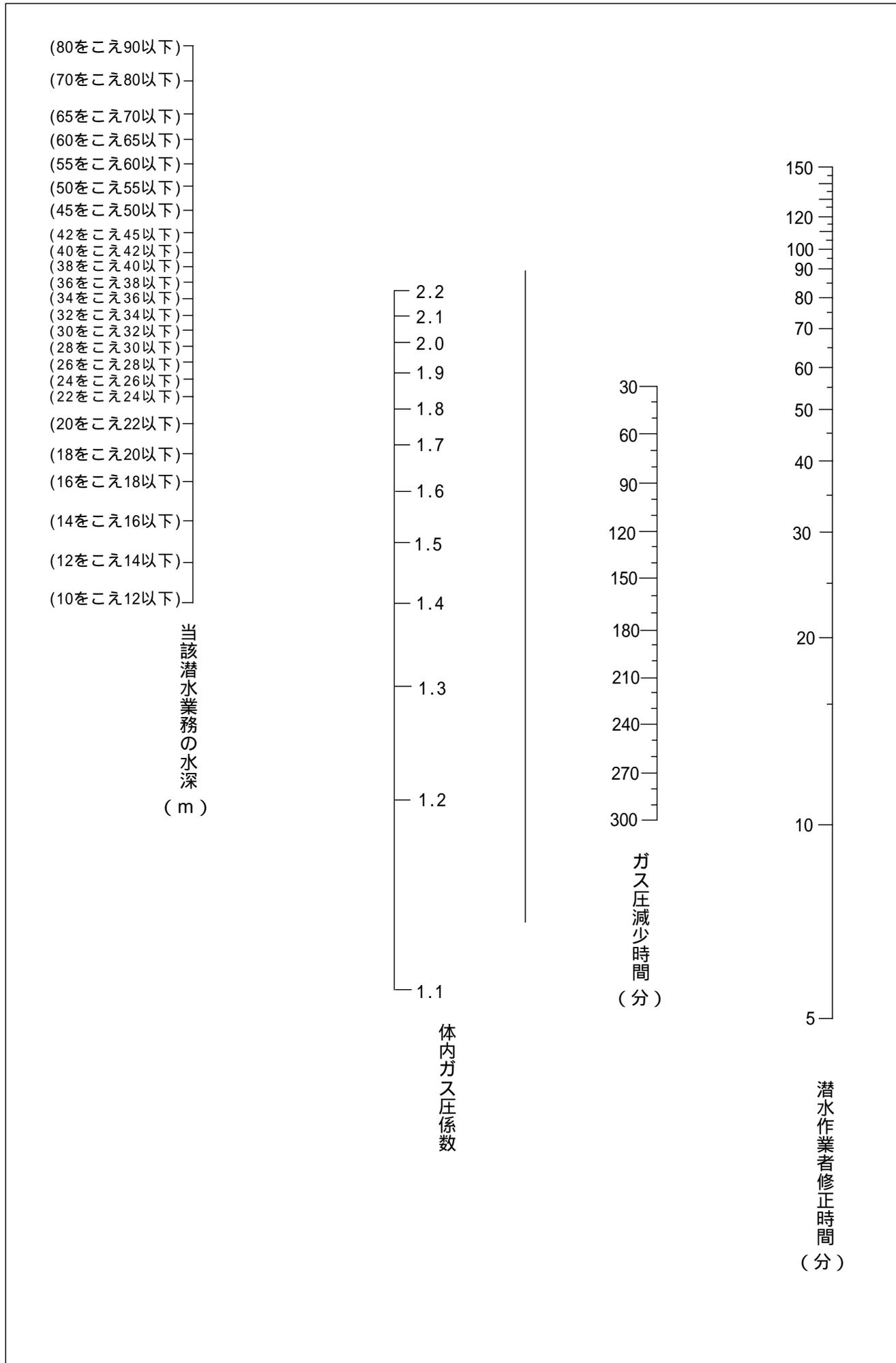
問 1 9 前問に関して、2回目の潜水を70分行った場合、浮上停止深度と停止時間は次のうちどれか。

- (1) 水深6mで21分、同じく3mで22分
- (2) 水深6mで26分、同じく3mで22分
- (3) 水深6mで27分、同じく3mで25分
- (4) 水深6mで27分、同じく3mで32分
- (5) 水深6mで29分、同じく3mで41分

問 2 0 水深10mを超える潜水業務を行う場合の緊急時の浮上等に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 緊急浮上を要する場合、なるべく潜水業務用時間表による第1回の浮上停止を行い、その後は浮上停止を行わないで法定の速度で水面まで浮上させる。
- (2) 特に緊急のため、第1回の浮上停止を行う余裕がない場合には、安全な範囲内で可能な限りゆっくり浮上させる。
- (3) 救命用胴衣やBCを使用して浮上させてはならない。
- (4) 緊急浮上後は、すみやかに潜水者を再圧室に入れ、再加圧を行う。
- (5) 再圧室においては、毎分0.08 MPa以上の加圧速度で、緊急浮上を開始した深度に相当する圧力までなるべく早く加圧する。

別表(2)



受験番号	
------	--

(高気圧障害)

- 問 1 呼吸系器官とその作用等に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。
- (1) 呼吸とは、空気中に含まれる酸素を体内に取り入れ、体内で生じた二酸化炭素を体外に排泄することである。
 - (2) 呼吸器は、鼻腔、口腔、咽頭、喉頭、気管などからなる気道と肺で成り立っている。
 - (3) 肺自体には運動能力がなく、主として呼吸筋(肋間筋)と横隔膜の協調による呼吸運動により、肺は伸縮する。
 - (4) 肺活量とは、息をできるだけ吸い込んだ状態から、できるだけ吐き出した量のことであり、訓練によって増加させることができる。
 - (5) 呼吸中枢は脊髄にあり、ここからの刺激によって呼吸に關与する筋肉が支配される。
- 問 2 潜水時の呼吸に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。
- (1) 素潜りで、息をこらえているとやがて苦しくなり、遂に止めていられなくなる限界点をブレーキング・ポイントという。
 - (2) 素潜りの時間を長くするために、その直前に水面で深呼吸を繰り返せばよいが、過剰換気の度が過ぎるとハイボカブニア(低炭酸症)になり、めまい、しびれ、けいれん等を起こす危険がある。
 - (3) 素潜りで、水中での息こらえ時間が長引くと、酸素欠乏とともに二酸化炭素蓄積状態となり、ブラックアウトと呼ばれる意識喪失を起こす恐れがある。
 - (4) 潜水者が送気を受けると、水中で活動することが可能となるが、呼吸ガスの成分や、潜水器の装着に伴う呼吸死腔の増加などにより悪影響を受ける。
 - (5) 潜水者が呼吸する空気の密度が増加すると、気道抵抗は増加するが、肺の換気能力は低下しない。
- 問 3 人体に及ぼす水温の作用等に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。
- (1) 人体が一定の体温を保っているのは、産熱と放熱がバランスよく調節されているからである。
 - (2) 人体の代謝により熱が生まれ、温度の低い空気や水等により熱が放散する。
 - (3) 水中で体温が奪われやすい理由は、水の熱伝導率が空気の約3倍であり、また、水を1上げるのに要する熱量は、水の何百倍もの体積の空気を1上げる熱量と等しいからである。
 - (4) 水中では、水温が20以下になると、通常、人体の保温が必要である。
 - (5) 空気中と違って、冷たい水中でシャツやセーターを身につけても保温の効果はない。
- 問 4 潜水によるスクイズの原因等に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。
- (1) 潜水作業でヘルメットやマスクの中の空気圧が外の水圧より低くなったときに起こる。
 - (2) 急速な潜降または潜水墜落によって起こることが多い。
 - (3) ヘルメット式潜水では、送気停止の場合、逆止弁が作動しないときに起こる。
 - (4) スクーバ式潜水では、潜降する際鼻から面マスクに空気を送ることがスクイズの予防になる。
 - (5) 皮下出血の症状が重いときは、医師の手当を受けることが必要であるが、応急措置として患部を暖める。
- 問 5 潜水による耳の障害に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。
- (1) 潜降しているとき圧迫感を生じたら、耳抜きを行う。
 - (2) 潜降の初期はゆっくり潜水する。
 - (3) 内耳を損傷すると、めまいを起こしたり、平衡機能障害に陥ることがある。
 - (4) 耳管は、通常大気中では開いているので、外耳道の圧力と中耳腔内の圧力には差がない。
 - (5) 水面から3m位潜降すると、ほとんどの人が鼓膜に痛みを感じるようになる。

問 6 減圧症の原因となる窒素に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 地上の大気圧下で、身体には窒素がヘンリーの法則、に従い、溶け込んでいる。
- (2) 潜水すると、水深に応じ呼吸する空気の圧力が高くなり、窒素の分圧が上昇するので、窒素は外気肺 血液 組織という経路で、体内に吸収され組織に溶け込んでいく。
- (3) 窒素の体内への溶け込みは、組織中の窒素分圧が外気のそれと平衡するまで続く。
- (4) 呼吸する空気の窒素分圧が低下すると、組織に溶解している窒素は、組織 血液 肺 外気へと溶け込みとは逆の経路で、体内外の窒素分圧が等しくなるまで体外へ排出される。
- (5) 身体組織に溶け込んでいる窒素の排出が、不十分な場合は、血管外の組織においては気泡をつくることはないが、血管中で気泡となることがある。

問 7 酸素中毒等に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 高い圧力下で純酸素を吸入すると、脳などの中枢神経系統が侵され、意識を失うことがある。
- (2) 酸素中毒は、送気中に二酸化炭素が多いときには起こりにくい。
- (3) 酸素中毒は、暑いとき又は寒いときなど環境条件が悪いときに起こりやすい。
- (4) 大気圧に近い圧力でも、長時間純酸素を吸入すると呼吸器に炎症を起こす。
- (5) 酸素中毒の発生には吸気の酸素分圧と吸入時間が大きく関係するが、人によって差があり、同一人でも日によってかなり異なる。

問 8 二酸化炭素中毒に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) 二酸化炭素中毒は、潜水者に供給される空気量が不足し、吸気中の二酸化炭素分圧が上昇すると、呼吸回数が増えるなどの症状を起こす。
- (2) 二酸化炭素中毒の予防として、送気用空気圧縮機の空気取り入れ口は、エンジンの排気その他有毒ガスが入らないように設置する。
- (3) 二酸化炭素中毒の予防として、デマンド式レギュレーターを用いて潜水する場合には、ゆっくりと深く呼吸する。
- (4) 二酸化炭素中毒は、二酸化炭素が血液中の赤血球に含まれるヘモグロビンと結合し、酸素の運搬ができなくなるために起こる。
- (5) 二酸化炭素中毒により、呼吸が弱っているときは、直ちに人工呼吸を始めるなどの処置を行う。

問 9 減圧症の症状に関する次の記述のうち、正しいものはどれか。

- (1) 減圧症は、浮上4～5時間後に発症するケースが多い。
- (2) 症状別の発生率では、中枢神経系の減圧症や呼吸循環系の減圧症が過半数を占める。
- (3) 脊髄を侵されると、目まいやはきけを特徴とするメニエル氏症候群を起こす。
- (4) 関節及び筋肉痛(いわゆるベンズ)は、潜水作業によっても異なるが、人体内で二酸化炭素を多く発生する膝、肘、肩などの関節部に多く発症する。
- (5) 呼吸循環器型の減圧症は、胸のつまった感じを特徴とし、チョークスとよばれ、しばしばせき込むようになるが、より重い症状へと進むことはない。

問 10 心肺蘇生法に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。

- (1) おぼれた者に人工呼吸を行う場合、体位は水平を基本にして、枕になるものを敷き、頭を高くする。
- (2) 口対口呼吸吹込み法を行うときは、口を開かせ鼻孔をふさぎ呼吸を吹きこむ。
- (3) 口対口呼吸吹込みで、呼吸を吹込んで口を離せば、被災者の肺の弾性により呼吸は排出される。
- (4) 口対口呼吸吹込み法による人工呼吸の回数は、1分間に12回程度である。
- (5) 心臓も停止している場合は、心臓マッサージも並行して行う。

(関係法令)

問 1 1 安全衛生教育に関する次の記述のうち、法令に定められていないものどれか。

- (1) 労働者を雇い入れたときは、その労働者に対して、従事する業務に関し一定の事項について、安全衛生教育を行わなければならない。
- (2) 労働者の作業内容を変更したときは、その労働者に対して、従事する業務に関し一定の事項について、安全衛生教育を行わなければならない。
- (3) 特定の危険又は有害な業務に労働者をつかせるときは、従事する業務に関する安全又は衛生のための特別の教育を行わなければならない。
- (4) 特別の教育の科目の全部又は一部について、十分な知識及び技能を有していると認められる労働者については、その科目を省略することができる。
- (5) 潜水業務に係る特別の教育は、潜水士免許の交付を受けている者が行わなければならない。

問 1 2 労働者に対し特別の教育を行うことが義務づけられている業務は、次のうちどれか。

- (1) 水深 1 0 m 未満の場所における潜水業務
- (2) 圧力調整器を点検する業務
- (3) 潜水器を点検する業務
- (4) 潜水作業への送気の調節を行うためのバルブ又はコックを操作する業務
- (5) 潜水用空気圧縮機を運転する業務

問 1 3 フーカー式潜水で空気圧縮機から送気する場合、潜水業者ごとに備える予備空気槽の内容積 V (リットル) を計算する次式の 内の A ~ C に入れる用語又は数値の組合せとして正しいものは (1) ~ (5) のうちどれか。ただし、潜水深度の単位は m、圧力の単位は MPa である。

$$V = \frac{\text{A} (0.03 \times \text{B} + 0.4)}{\text{C}}$$

- | | A | B | C |
|-------|-----------|---------|-----------|
| (1) | 予備空気槽内の圧力 | 4 0 | 最高の潜水深度 |
| (2) | 6 0 | 最高の潜水深度 | 予備空気槽内の圧力 |
| (3) | 最高の潜水深度 | 6 0 | 予備空気槽内の圧力 |
| (4) | 4 0 | 最高の潜水深度 | 予備空気槽内の圧力 |
| (5) | 予備空気槽内の圧力 | 6 0 | 最高の潜水深度 |

問 1 4 空気圧縮機を用いて送気する設備に関する次の記述のうち、法令上、誤っているものはどれか。

- (1) 空気槽は、潜水業者ごとに設けなければならないが、予備空気槽は条件によっては設けなくてもよい。
- (2) 空気清浄装置は必ず設けなければならない。
- (3) 潜水作業に圧力調整器を使用させる場合であっても、流量計は必ず設けなければならない。
- (4) 定量送気式の場合の送気量は、潜水業者ごとに、その水深の圧力下において、毎分 6 0 リットル以上としなければならない。
- (5) 空気圧縮機は、1 週間に 1 回以上点検しなければならない。

問 1 5 携行させたボンベ (非常用のものを除く。) から給気を受けて行う潜水業務に関する次の記述のうち、法令上、誤っているものはどれか。

- (1) 潜降直前に、潜水業者に対し、当該潜水業務に使用するボンベの現に有する給気能力を知らせる。
- (2) 潜水作業に異常がないかどうかを監視するための者を置く。
- (3) 潜水作業にゲージ圧力 1 0 MPa 以上の気体を充てんしたボンベからの給気を受けさせるときは、二段以上の減圧方式による圧力調整器を使用させる。
- (4) さがり綱には、水深を表示する木札又は布等を取り付けておく。
- (5) 潜水深度が 1 0 m 未満の場合でも、さがり綱を使用させる。

問16 潜水業務用時間表（高気圧作業安全衛生規則別表第2）等に関する次の記述のうち、正しいものはどれか。

- (1) この表は、水深10m以上の場所における潜水業務に適用され、1日についての潜水回数の制限が定められている。
- (2) この表による浮上停止時間は、浮上を停止する水深が深い場合ほど長い。
- (3) この表による浮上を停止する時間の合計が長いときほど、業務間ガス圧減少時間は短くなる。
- (4) 潜水作業者の体内のガス圧係数を減少させるため潜水業務間に与える休息時間は、この表による業務間ガス圧減少時間を超えてはならない。
- (5) 業務終了後ガス圧減少時間として定められている時間以上の時間を、1日の最終の浮上を終了した後引き続き与え、その間は重激な業務に従事させてはならない。

問17 連絡員の配置とその実施事項に関する次の記述のうち、法令上、誤っているものはどれか。

- (1) 潜水方式に関係なく、連絡員を配置しなければならない。
- (2) 潜水作業者と連絡をとり、その者の潜降や浮上を適正に行わせる。
- (3) バルブ等を操作する者と連絡をして、潜水作業者に必要な量の空気を送気させる。
- (4) 送気設備等の事故により潜水作業者に危険又は健康障害の生ずるおそれがあるときは、速やかに潜水作業者に連絡する。
- (5) ヘルメット式潜水器を用いて行う潜水業務にあつては、潜降直前に潜水作業者のヘルメットが、かぶと台に結合されているかどうかを確認する。

問18 医師が必要と認める期間、潜水業務への就業を禁止すべき疾病として、法令に定められていないものは、次のうちどれか。

- (1) じん肺症
- (2) メニエル氏病
- (3) リウマチス
- (4) バセドー氏病
- (5) 十二指腸潰瘍

問19 再圧室に関する次の記述のうち、法令上、誤っているものはどれか。

- (1) 水深10m以上の場所における潜水業務を行うときは、再圧室を設置し又は利用できる措置を講じなければならない。
- (2) 再圧室を使用するときは、出入に必要な場合を除き、主室と副室との間の扉を閉じ、かつ、それぞれの内部の圧力を等しく保たなければならない。
- (3) 再圧室を使用したときは、そのつど、加圧及び減圧の状況を記録しなければならない。
- (4) 再圧室については、設置後3月を超えない期間ごとに一定の事項について点検しなければならない。
- (5) 必要のある者以外の者の再圧室設置場所への立ち入りを禁止し、その旨を見やすい箇所に表示しなければならない。

問20 潜水士免許試験や免許に関する次のAからDまでの記述について、誤っているものの組合せは(1)~(5)のうちどれか。

- A 水深10m未満での潜水業務においては潜水士免許は必要ない。
- B 潜水士免許試験に合格しても満18才にならないと免許は与えられない。
- C 故意又は重大な過失により、重大な事故を発生させたときは、免許の取り消し等の処分を受けることがある。
- D 免許証を滅失したときは、労働基準監督署長に再交付申請をする。

- (1) A, B
- (2) A, C
- (3) A, D
- (4) B, C
- (5) B, D